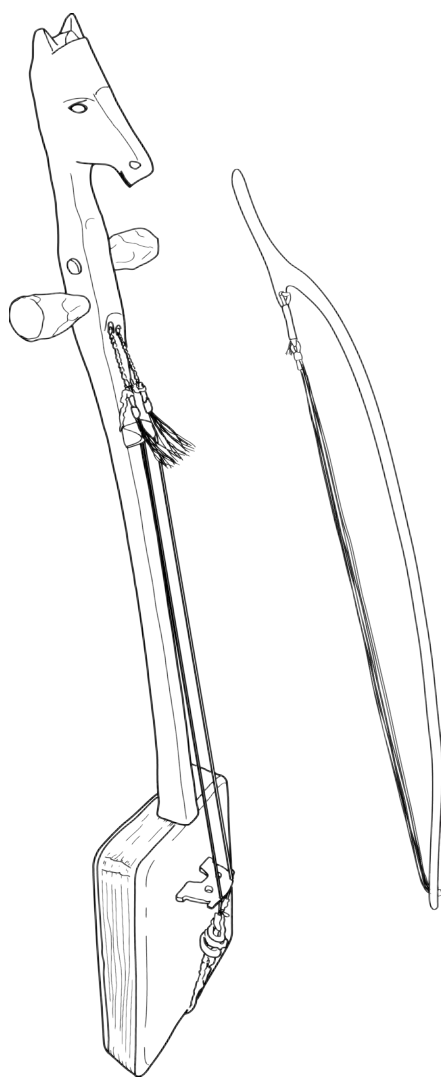


オシラサマ馬頭琴の旅

DVD 添付資料



岡本康兒

2014 - 15

目 次

はじめに	・ ・ ・ ・ ・	i
東北・北海道・岐阜の訪問地 作業場所 および 作業・活動（地図）	・ ・ ・	ii
岩手県内の訪問地 作業場所 および 作業・活動（地図）	・ ・ ・ ・ ・	iii

「オシラサマ馬頭琴の旅」

1. オシラサマ馬頭琴について	・ ・ ・	1
概 要	・ ・ ・ ・ ・	1
動 機	・ ・ ・ ・ ・	2
パロディー	・ ・ ・	2
製 作	・ ・ ・ ・ ・	3
2. オシラサマと馬頭琴	・ ・ ・	5
オシラサマ	・ ・ ・	5
馬頭琴	・ ・ ・ ・ ・	5
起源譚	・ ・ ・ ・ ・	6
まとめ	・ ・ ・ ・ ・	8
最後に	・ ・ ・ ・ ・	8

DVD「オシラサマ馬頭琴の旅」メニュー

スライドショー

旅の記録（22～49枚）	16本	（撮影：岡本康児、BGM：嵯峨治彦、浜垣誠司）
馬頭琴の製作（147枚）	1本	（撮影：岡本康児、BGM：嵯峨治彦、浜垣誠司）

動 画

星めぐりの歌	(4:19)	(詞・曲：宮澤賢治、演奏：嵯峨治彦、撮影：岡本康児)
星めぐりの歌-牧歌1	(4:25)	〃
星めぐりの歌-牧歌2	(3:30)	〃
Mulberry Xylophone Improvization	(0:26)	(演奏・撮影：岡本康児)

録 音（演奏・録音・調整：嵯峨治彦）

白 鳥	(2:40)	(内モンゴル曲、演奏・録音：嵯峨治彦)
鑪 山 (たたらやま)	(2:32)	(曲・演奏・録音：嵯峨治彦)
みちびき	(2:13)	(曲・演奏・録音：嵯峨治彦)
星めぐりの歌	(3:30)	(詞・曲：宮澤賢治、演奏・録音：嵯峨治彦)
ジョノン風 (仮題)	(3:50)	(曲・演奏・録音：嵯峨治彦)

はじめに

2014年9月9日から11月30日の約3ヶ月、旅先での楽器製作を行うために東北と北海道を旅した。その間に個人的なメモとして製作進捗や風景などの写真を撮りためた。始めは公開の意図も無く漫然と撮ったので、気がつけば2000枚にのぼる。

旅の途中から、完成した楽器の演奏を撮影・録音し、そのデータをDVDに編集して、材料や情報を提供していただいた方々にお礼の意味も込めてお渡ししたいと思うようになり、さらに「結果」としての映像や音源だけでなく、各地での製作のプロセスや旅の先々で見たものを何気なく撮影した画像も含めることにした。稚拙で粗雑な写真も多いけれどそれもまたあるがままの記録であるし、旅してこそ撮れるもの含まれる。それらを旅で関わった方々に鑑賞していただくことができ、旅と楽器製作が共有されるならばこんなに旅人冥利に尽きることはない。

旅を始めるまでは思いもよらなかったことだが、旅先での楽器製作から演奏の録画や録音、そして帰宅後のDVDの制作・配布まで含め、今回の「旅そのもの」が、一種の「アート行為」と言えるのではないだろうか、ということ。作品の展覧会や楽器の演奏会という芸術における一般的な作品表現形式とは違ってはいるが、少なくとも自分のこれまでの作品制作手法とはまるで違う領域に足を踏み入れたことは確かで、昨秋は二重の意味で「旅」をしていたことになる。

このディスクは家庭用の機材で再生できるようにDVDフォーマットで記録してある。旧来規格のDVDに昨今のハイビジョン画質は望むべくもないが、パソコンを使わずとも誰にも手軽に観られることを優先した。

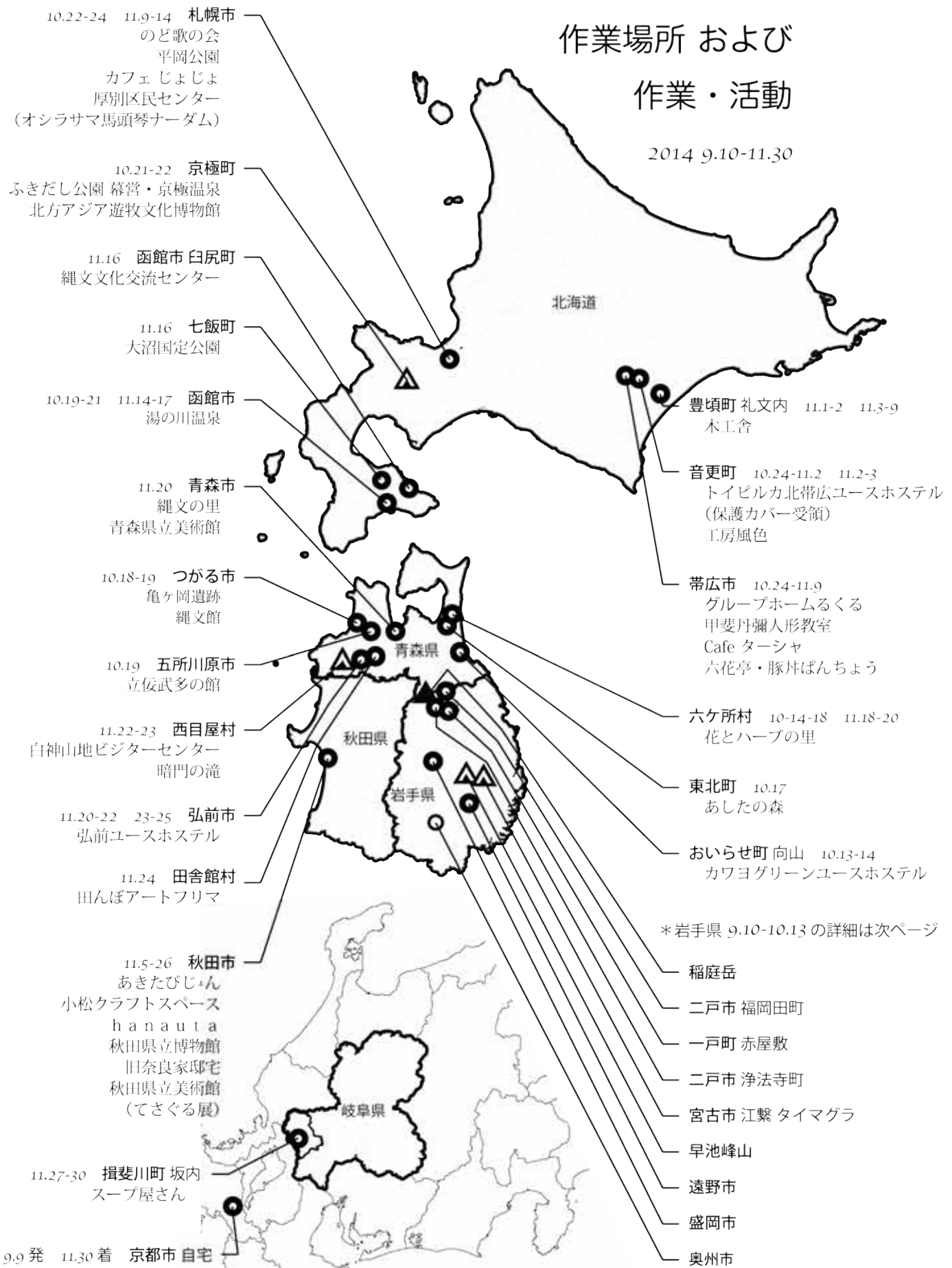
録画・録音した音源はスライドショーのBGMとしても使用している。なお、嵯峨治彦氏による録音5曲と、提供を受けた数枚の写真を除き、写真・動画の撮影には専用機材ではなくiPhoneの付属カメラを使用した。そのため画質や音質はそれなりでしかない。先に述べたように元々はメモ代わりに記録したものであることをご理解いただきたい。なお巻頭に訪問地や日付、活動内容などを記した地図を配したのでスライドショーの参考として参照されたい。

東北地方の民間信仰「オシラサマ」とモンゴルの伝統楽器「馬頭琴」の組み合わせは奇異に感じられることだろう。その違和感も作品の狙いではあったが、やってみたら意外にも相補的な融合が起り、また旅の途中や帰宅後にこの資料を纏める中でそれを後ろ盾のような背景も微かに見えた気がする。資料後半にオシラサマと馬頭琴について夫々個別に長々書いたのはそのためである。ただし、DVDはあくまで私個人の創作した妄想的「作品」の一部であり、本資料はその鑑賞の手引であって内容の学術的な意味や価値、正確性を保証するものではないことをお断りしておく。

東北・北海道・岐阜の訪問地

作業場所 および 作業・活動

2014 9.10-11.30



*岩手県 9.10-10.13の詳細は次ページ

地図は国土交通省国土地理院の基盤地図情報(上)およびWEBサイト「白地図専門店」<http://www.freemap.jp>の無料版(下)を加工して使用

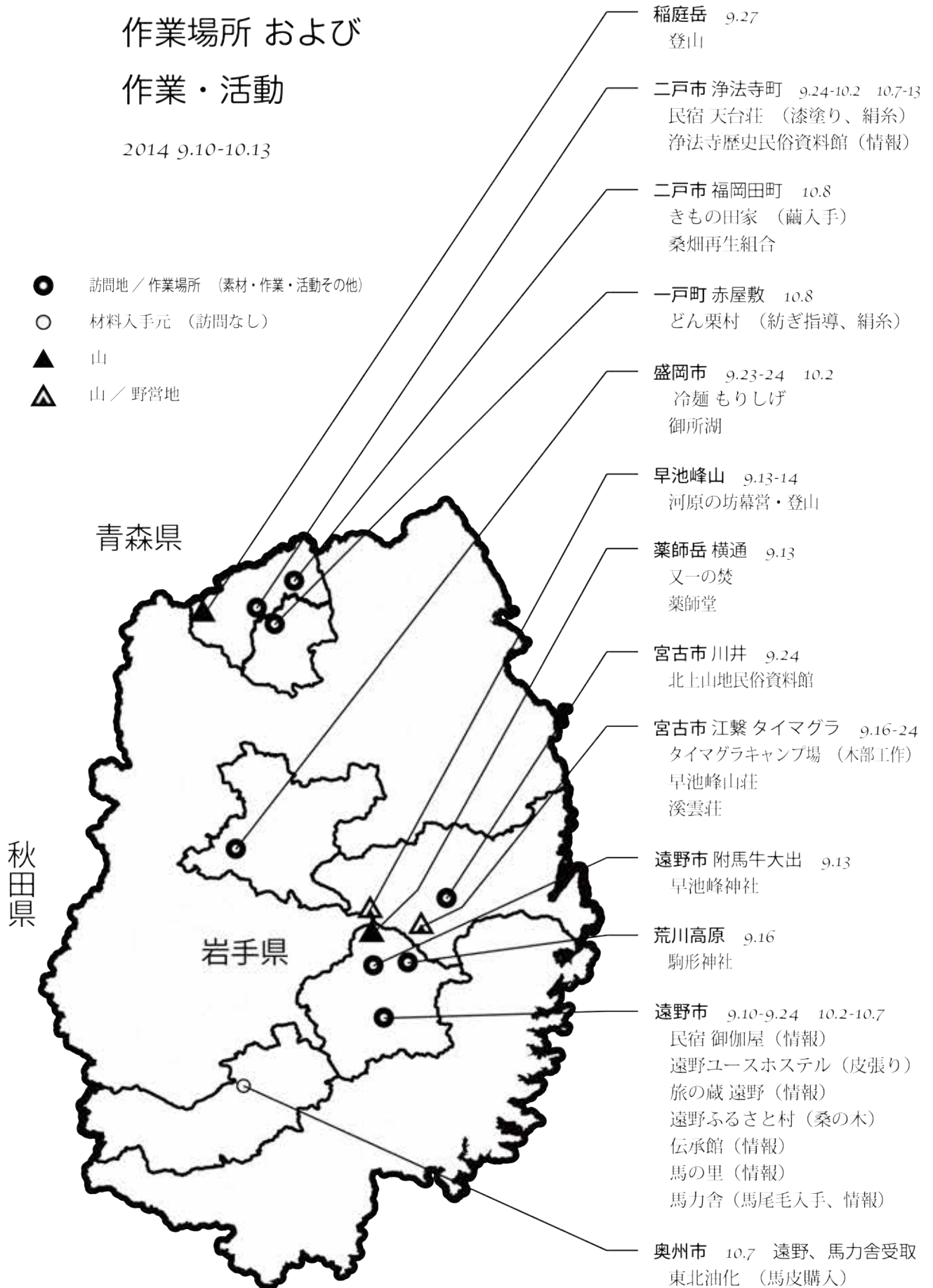
岩手県内の訪問地

作業場所 および

作業・活動

2014 9.10-10.13

- 訪問地 / 作業場所 (素材・作業・活動その他)
- 材料入手元 (訪問なし)
- ▲ 山
- △ 山 / 野営地



地図は国土交通省国土地理院の基盤地図情報を加工して使用



オシラサマ馬頭琴の旅

2015年1月28日（2月17日校正、改定）

岡本康兒

1. オシラサマ馬頭琴について

概要

「オシラサマ馬頭琴」は東北地方の民間信仰「オシラサマ」の馬頭とモンゴルの楽器「馬頭琴」を合体させた楽器です。一般的な馬頭琴より小ぶりで全長約90cm、皮張り胴の古い形態を残しています。材料として、竿、胴、糸巻き、駒の木部にはオシラサマに倣って桑の木、絃には馬尾毛と絹、胴の振動膜にはモンゴルの伝承譚に従って馬皮を使用し、塗装には拭き漆を施しています。

オシラサマと馬頭琴の馬頭という外見上の共通点と、それぞれが持つ起源譚の類似に着目してこれら異なるものを融合させ、「いかにもありそう」で実は存在しないニセモノを作りあげることで、一義的な楽器としての完成度よりは「似て非なる」一種のパロディーとしての面白さを主眼に置きました。また、当初は材料調達や製作をオシラサマと馬に縁の深い東北全体を製作のフィールドとして考えましたが、結果的にほとんどの情報・材料の収集および加工・製作の作業を岩手県内で行うことになりました。

完成した馬頭琴は札幌の演奏家、嵯峨治彦さんによって演奏されました。そのときの録画と録音はこのDVDに収められています。また、製作の工程を記録した画像もこのDVDの「馬頭琴の製作」というメニューからスライドショーとして見ることができます。

北海道十勝での駒の製作をもって物理的完成とし、その後の札幌再訪での録音、帰途の青森と秋田、岐阜の訪問も含め、旅を行った2014年9月9日から11月30日を製作期間としてひとまず区切りましたが、現在に至るDVD制作も一連の製作作業に含まれます。

動機

工芸品や美術作品は完成し披露される結果がすべてであり、普通はその製作プロセスを見せることも問われることもないのですが、前者の工芸においては熟練した職人の手練の技術がそのまま作品に反映されます。しかし「技術は二の次」である後者の彫刻家である私は修行・研鑽を積んだ工芸職人ではありませんから、技術の不足を覆い隠すためにはおっつけ電動機械工具に頼るということになります。もちろん電動工具を使いこなすにも職人技は必要ですが、私はそれさえも精々が素人日曜大工のレベルでしかありません。電動工具はより良い物を作るためというより、専ら手抜き的手段として依存しているのです。

技術があまり重視されない美術分野のひとつである、彫刻という表面上の見テクレだけで十分な「視覚芸術」をやっている分には、これまでアイデアの具現化に製作の手段を選んできませんでした。おかげで仕事場には楽をするために次から次へと買い求めた電動工具や機械が溢れかえっているありさまです。時に我に返ってそれらに頼らずに製作したいと思いつつ、眼前に並ぶ便利の誘惑には勝てずにいたのです。せめて一度でも、普段頼りきっている電動工具を捨て、狭い工房を出て、たとえ稚拙であろうと自分自身の「手」の技術を、そして願わくば内面までをもその姿に反映できる素朴な作品を作れないものか、と考えるきました。漂泊の民サンカや木地師のように人里を離れて山野を彷徨いながら、現代文明の利器の助けもなく限られた手工具しか持たない不自由な旅の空の下で、機械の呪縛から自らを解き放ち自由にもの作りをしてみたい、との思いを募らせていたのです。

パロディー

漂泊の山の民のごとく限られた手工具だけを携えて野山に分け入って材料を収集し、人里離れた場所で製作しながら孤高の旅職人を気取ってみようというのも一種のパロディーの試みでした。ただ実際は、旅に出てみると大勢の人から情報や材料の提供、応援を受けることになり、そういう驕った思いは吹き飛ばされてしまうのですが。

手練の職人のようにはできなくても機械の力を借りず、稚拙さを敢えて隠すことなくありのままの自らの手業で素朴な作品を作りたい。そのお手本となるものが、おそらくは北国の名もない農民たちが硬い桑の棒きれを鉦一本で彫りあげたのだらうと思われる「オシ

ラサマ」だったのです。素朴なオシラサマと比べればあの円空仏の闊達な彫り目ですらテクニクに走ったように見えてしまいます。ただし、オシラサマの姿を借りてはいても、あくまでもそれは楽器の装飾であり、信仰の対象である御神体そのものを作ろうとしたものではないということを記しておかなければなりません。

自らの手作りの原点に立ち戻って作るものは、私の楽器作り最初期の作品と同じ馬頭琴であるべきだと考えました。モンゴルの馬頭琴は長い歴史を持つと言われますが、皮張りだった共鳴胴が現在の板張りになったのはわずか数十年前のことで、構造的・機能的進化がまさに現在進行中の楽器です。変遷する馬頭琴をモチーフとして、モンゴルには存在しない「ニセ馬頭琴」なるパロディー楽器をこれまでに数種類製作しました。本家の「進化」ベクトルの延長上にある（であろう）エレキ化や、進化を「あらぬ方向」にブレさせた和紙張り共鳴胴の採用など馬頭琴の多様化を示しましたが、今回は思い切ってその進化のベクトルを180度ねじ曲げて先祖返りさせてみたくなりました。前に述べたような自らの製作手法と、それに依って出来上がる作品の、両方の原点回帰を目論んだのです。

製 作

先祖返りとは言え旧来の馬頭琴を単に模倣し再現するのではなく、後述のオシラサマと馬頭琴の伝承譚から「馬頭」という共通項を括りだして「因数分解」的に楽器を具現化するという事です。少々楽器作りの常道から外れても材料の選定や工作の手法はできるだけ伝承譚に基づき、具体的には後述する『スーホの白い馬』や『フフー・ナムジル』の物語の記述に忠実に行うことを目指しました。実のところモンゴルで馬頭琴に桑の木が用いられるというのは聞いたことがないし、分厚くて響きの悪い馬の皮が過去において実際に張られていた可能性は低くても、それらを敢えて使用しました。「パロディー＝偽物」ですが、楽器として「本当」に機能しつつ、かつ「虚構」の物語にできるだけ「忠実」であるという「虚実の綯い交ぜ」が狙いでした。

材料調達と製作工程の大部分は、養蚕の神様オシラサマのふるさとの一つであり南部曲がり屋で知られる馬産地岩手で行いました。旅の途中で桑の木や馬の尻尾の毛、生皮、漆、蚕の繭などの材料を探し求め、あるときは野営しながら、またあるときは宿の庭先で木を

削り彫り、生皮の毛を剃って張り、漆を精製して塗り、繭を解して絹糸を紡ぎ、ひと月あまりの期間でひとまずの完成を見ました。その後も東北・北海道で旅を続けながら調整や追加の部品作り、馬頭琴演奏家による演奏披露や録音も行いましたので、それもらも製作工程とすると旅の期間はおよそ80日に及びます。

材料・情報の提供者、演奏者、製作の場所は次のとおりです。（旅程時系列順）

材料／情報	住所／場所	提供者（敬称略）／購入先
情報	遠野市新穀町	佐々木剛一（民宿御伽屋）
情報	遠野市新穀町	鈴木裕子（旅の蔵 遠野）
桑の木	遠野市附馬牛町	千葉弘子（遠野ふるさと村）
情報	遠野市土淵町	運萬治男（伝承園）
桑の木	遠野市綾織	岩館尚文
馬尾毛	遠野市松崎町	岩間敬（馬力舎）
情報	二戸市浄法寺町	小軽米実（民宿天台荘）
情報	二戸市浄法寺町	小田嶋義明、中村弥生（浄法寺歴史民俗資料館）
情報	二戸市浄法寺町	泉山和徳（二戸市浄法寺総合支所うるし振興室）
情報	香川県三豊市	十鳥弓枝（漆芸作家、漆掻き研修生）
生漆	二戸市浄法寺町	佐藤正勝
技術指導	一戸村赤屋敷	赤屋敷タマ（どんぐり村）
蚕繭	二戸市福岡	田家亘（きもの田家）
技術指導	二戸市浄法寺町	小軽米さんの分家の奥さん
馬生皮	奥州市	東北油化
保護袋製作提供	北海道音更町	清瀬希久子（トイピルカ北帯広ユースホテル）
作 業	場 所	施 設
木部加工	宮古市江繋	タイマグラキャンプ場
皮張／弓製作	遠野市土淵町	遠野ユースホテル
漆塗／絹糸紡	二戸市浄法寺町	民宿天台荘
駒追加製作	北海道音更町	トイピルカ北帯広ユースホテル
演奏／録音	北海道札幌市	嵯峨治彦（のど歌の会）

ここに記した以外にも大勢の方の協力や応援をいただきました。また楽器としての「物

理的」な完成以降にもさらに多くの出会いがあり、ここに全てを書ききることはできませんでした。なかには名前すら聞き忘れた方がいらっしゃいます。至らぬことお詫びします。

最初、旅に出るまでに夢見たように材料探しや製作で山野を孤独に放浪したわけでもなく、結局のところサンカ・木地師のような「漂泊の民のパロディー」製作形態というのは成立しなくなってしまいました。逆に一人の力では成し得ないことをオシラサマ馬頭琴の製作を通してやり遂げようとしている、という自覚を旅の中で持つに至りました。電動工具に囲まれてすべて事足りる工房の利便を拒み、単独自力の製作環境を求めて旅に出たはずが、最も苦手としてきた共同作業へと思わぬかたちで引き込まれてしまったわけです。

2. オシラサマと馬頭琴

オシラサマ

「オシラサマ」は東北地方の多くの地域で見られる民間信仰です。御神体は長さ数十cm、直径数cmほどの桑の棒に「オセンダク」と呼ばれる端布を重ね着されています。二体一組で一般民家に祀られ、一体が人頭、もう一体は馬頭の形であることが多いようです。蚕、馬、農業、家庭などの守り神で、目病の治癒にも利益があるとされていますが、祀るのを止めると祟るなどという祟り神の性格もあると言われます。オシラサマを祀る家庭では年に一度の祭祀「オシラ遊ばせ」で家の女性、子ども、もしくは呼び寄せたイタコにより「オシラ祭文」が唱えられ、新しいオセンダクが一枚重ねられます。

馬頭琴

「馬頭琴」は長さ1m前後の二絃弓奏楽器です。下部に台形の共鳴胴を持ち、竿の頂端には馬頭が彫刻されていてその名の由来となっています。弓だけでなく絃にも馬の尻尾の毛を束ねて使用します。現代の馬頭琴の胴はバイオリンやチェロに倣い板張りで、広い演奏会場での演奏に適した強く張りのある音を出すことができます。しかし数十年前までは三味線のように動物皮が張られていて、音量は小さく音質も少しくぐもった渋いものが主流でした。ゲルと呼ばれる小さな移動式住居の中で行う内輪の演奏や歌の伴奏に使うには

それで十分だったのです。面白いことにモンゴルでは単にモリン・ホール（馬の楽器）と呼ばれ、以前には馬頭の無いものも多く見られたということです。しかも「馬頭琴」という名称には昭和初期の日本人の女性フィールドワーカー（鳥居きみ子）の関わりも指摘され、漢字語でこう呼ばれるようになったのも意外に最近のことだったようです。

起源譚

娘と馬の悲恋を描いた物語は東北各地でオシラ祭文として唱えられ、また昔話や伝説として民間に広く語られてきました。中でも民俗学者、柳田国男が遠野の佐々木喜善から聞き書きした『遠野物語』の第69話が有名です。ただし『遠野物語』には養蚕の起源となる後日談が書かれていないので、以下にそれも加えたあらすじを記しておきます。

ある百姓の娘が馬を愛するあまりその馬と夫婦になり、怒った父親は馬を桑の木に吊して殺す。悲しむ娘は馬の首に乗り、あるいは皮に包まれて共に天に昇ってしまう。愛する娘と馬を失くして嘆く父親の夢枕に娘が立ち、臼の中にいる馬の顔をした虫に桑の葉を与えれば絹をもたらすと告げる。オシラサマが桑の木でできており、娘と馬の頭をしているのはこのためだという。

余談ですが、オシラサマと絹の起源譚の源流は中国東晋時代に編纂された『搜神記』の中の一話（巻14、350「馬の恋」）に求められそうです。『搜神記』では娘の戯言を真に受けて恋した馬は片想いのまま殺されてしまうのですが、大筋で非常によく似ています。

遠方へ出征していた父親を突然故郷の飼い馬が迎えに来た。家を察じて馳せ帰ると、それは「父を連れて帰れば嫁になってもよい」という娘の戯言に馬が乗せられたのだと判り、父は怒って馬を殺して皮を剥ぐ。娘が死んだ馬を詰り剥がれた皮を踏みつけた途端に皮は娘を包んで飛び去ってしまう。後日、桑の木の上で馬の皮と一つになり蚕と化して糸を吐く娘が見つかる。

この話がいつの時代に日本へ渡り来てオシラサマと結び付けられたのかは判りません。あるいはさらに古い共通の祖話が存在したか、ひょっとするとオシラサマの方が古くて、全く逆の流れだったのかもしれませんが。いずれにしても私は、現在語られているオシラサマの物語の中で馬が死に「絹を生み出す蚕に変身」というくだりに、死んだ馬が「音楽を紡ぎ出す楽器として再生」される馬頭琴のことを思い起こさずにはられないのです。

遠くモンゴル（中国内蒙古）で語られる少年と馬の愛情を描いた馬頭琴の悲話は、日本でも赤羽末吉の絵本や小学校国語教科書の『スーホの白い馬』で広く知られています。そのあらすじは以下のようなものです。

少年の大切に育てた愛馬が殿様に取りあげられる。馬は少年のもとに逃げ帰るが、兵士たちの矢で深手を負い、家に着くと死んでしまう。悲しむ少年の夢枕に馬が立ち、自分の体の毛や皮、スジや骨で楽器を作るように言う。こうして出来上がったのが馬頭琴。

また隣のモンゴル国ではスーホの話はあまり知られておらず、代わりに「フフー・ナムジル」という別の馬頭琴起源譚があります。バリエーションも多いようですが私の知る筋書きでは次のような小学校の教科書にはまるで相応しくない物語になっています。それでも飼い主の夢枕に死んだ馬が現れ、自分の体で楽器を作るように告げる結びは同じです。

ある若者が辺疆での防人の務めを終えて故郷へ帰るとき、現地妻から毎夜通って来れるようにと一晩で千里の道を駆ける有翼の駿馬をもらうが、馬は嫉妬した故郷の本妻に翼を切られ殺されてしまう。

動物がその死を介して別のものに変身し再生するという話は日本やモンゴル以外にも世界中に数多くあるのかもしれませんが。今こうやってオシラサマ馬頭琴の発想のきっかけとなった物語を振り返りつつあらためて調べ物をしていると、中国に古くから馬と蚕にまつわる「蚕馬」または「蚕娘」と言われる伝説がいくつもあったことが判ってきました。前出の『搜神記』中の一話は今回の旅の途中で人に教えられ初めて知ったのですが、やはり古い蚕馬の一つです。『搜神記』の蚕馬とオシラサマ起源譚の類似はすでに述べましたが、もう一つ「恋するあまり遠路を駆ける馬」という筋立てに、どこかフフー・ナムジルの「恋するものを乗せて一晩千里を翔ぶ馬」やスーホの「権力者に奪われても主人恋しさに逃げ帰る馬」という件の原型を微かに垣間見る気がするのです。ただ、それらの関係性を学術的に証明しようというつもりは毛頭なく、別々の話の中に偶然見つけた面白い類似点が異なる物を融合させるイマジネーションの拡がりと呼び起こし、それがまた旅の途中で創作物の裏打ちエピソードとして「虚実」の連想に作用したに過ぎないと断っておきます。

まとめ

オシラサマと馬頭琴を結びつける着想は、「馬頭」という形態上の共通点だけでなく、それぞれの由来の物語に見られる「馬の死」と「姿を変えた再生」という類似性の面白さからも得たのです。「変身」や「再生」というキーワードは毎日の惰性的な製作環境に厭っていた私にとって魅力的な動機付けになりました。さすがに自分の「死」を介在させるわけにはいかず、奥の細道を旅した芭蕉のような「死の覚悟」もありませんでしたが、遠く家を離れ、遥かなオシラサマ縁の地に赴いて桑の木や蚕の繭を探し、スーホやナムジルの物語のように馬の毛や皮を使って新たに馬頭琴を創り出すという行為に、私自らの生まれ変わるプロセスをなぞらえようとしていた、とも言えます。

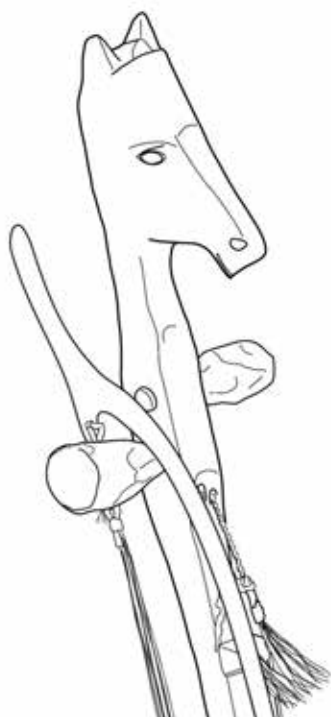
しかし旅を始めるや否や、見知らぬ人たちとの不思議な縁の連続に、想い描いていた孤高の作品製作の目論みは吹き飛んでしまいました。その代わり行く先々で出会う人から情報や材料だけでなく、応援や期待とともにもらい受ける「特別な力」を日増しに感じるようになりました。四国八十八ヶ所巡りのお遍路さんが土地の人の「お接待」を受け、チベットの巡礼者が道すがら喜捨の志を授かり、施す者から負託された信仰心を共有しながら聖地を巡るのはきっとこのようなことなのだろう、という心持ちになりました。応援や期待は重荷になることなく、さらに次へ進み馬頭琴を仕上げてゆく力となって背中を押してくれて、そのおかげで三月にわたる長い旅を全うできました。実は出発のほんのひと月前まで、馬頭琴製作の旅かそれとも四国の歩き遍路かの選択に迷っていたのです。結局前者を選びましたが、幸運にもほんの少し巡礼の気持ちを味わうオマケまであったわけです。

最後に

旅の先々で撮ったスナップ写真のスライドショーをこのDVDに収録しています。当初はこのようなかたちで記録を発表するつもりもなく、ちゃんとした撮影機材も持たずに出かけ、行き当たりばったりでスマートフォンのカメラのシャッターを押していました。そのため写真に何がしかのコンセプトがあるわけでもなく、また出会った人すべてが写っているわけでもありません。それでもいつの間にか撮影枚数は二千を数えるほどになっていました。その中から約600枚を選び、製作過程の記録1編と訪れた地域ごと時系列に写真を順に並べた16編の音楽付きスライドショーにまとめてあります。

オシラサマ馬頭琴製作の地、岩手の生んだ詩人宮澤賢治の作詞・作曲になる「星めぐりの歌」と「牧歌」を最初の演奏曲として、岩手に縁の深い馬頭琴演奏家の嵯峨治彦さんに演奏していただきました。その選曲も嵯峨さんの提案によるものです。さらに嵯峨さんは追加のモンゴルの曲やオリジナル曲まで録音をしてくださいました。加えて、宮澤賢治研究家の浜垣誠司さんをお願いし、浜垣さん自身がMIDI+Vocaloidで制作された賢治の楽曲を提供していただきました。アコースティックで素朴な皮張り馬頭琴と電子的な合成音によるコンピューター音楽が時代や文化背景、地理的な隔たりを越えて賢治の愛した音楽を奏でるという不思議な対比と、それでいて心地良い組み合わせをスライドショーの写真と共に楽しんでいただけたら幸いです。

末尾になりましたが、この旅で訪れた岩手、青森、北海道、秋田、岐阜で出会ったすべての方にお礼を申し上げます。また遠くから見守ってくださった多くの知人、友人にも感謝します。全くの個人的な発想で始めた楽器作りに望外の温かい協力や応援をいただき、ありがとうございました。



写 真

岡本康兒	下記以外すべて
西村幹也	京極の一部 北方アジア遊牧文化博物館 内部
嵯峨治彦	札幌の一部
泉谷衆	秋田の一部
タワマンぶらり旅	向山の一部

イラストレーション

岡本康兒	DVDジャケット、DVDレーベル、添付資料冊子の図版
------	----------------------------

ビデオ

岡本康兒	撮影、編集
------	-------

音 楽

(順不同、個別の作詞作曲クレジットはDVD中に記載)

嵯峨治彦	オシラサマ馬頭琴 演奏
浜垣誠司	MIDI、Vocaloid DTM 編曲、編集
岡本康兒	木琴、エレキ馬頭琴 演奏

資料閲覧・見学 (訪問順)

遠野市立図書館・博物館
宮古市北上山地民俗資料館
二戸市浄法寺歴史民俗資料館
北方アジア遊牧文化博物館
京都市中央図書館

参考図書

- 岩手史学会 (編)、工藤絃一 『「遠野物語」と浄法寺』 2014 大和学芸図書
(岩手史学研究 第94、95号抜刷)
- 大塚勇三 (著)、赤羽末吉 (絵) 『スーホの白い馬』 1967 福音館書店
- 岡本太郎 『神秘日本』 1999 みすず書房 (岡本太郎の本3)
- 干宝 (編)、竹田晃 (訳) 『捜神記』 1964 平凡社 (東洋文庫10)
- 柳田国男 『新版 遠野物語 付・遠野物語拾遺』 初1965 新2004 角川書店
(角川ソフィア文庫)
- 柳田国男 『山の人生』 2013 角川書店 (角川ソフィア文庫)
- 青木隆紘 『モンゴル音楽@wiki/モリン・ホール(馬頭琴)』 <http://www5.atwiki.jp/mongolhugjim/pages/148.html>



岡本 康兒 (おかもとこうじ)

〒603-8487 京都市北区大北山原谷乾町25-62 Email: okaponkoji@gmail.com

